〈英語教育リレー随想〉 第 59 号　　2014 年 12 月

「時代の風」―未来圏から吹く風

中井 弘一

鴨長明の『方丈記』の冒頭は、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、又かくのごとし」で始まる。英語では、“The river flows incessantly and the water is not the same but varies every moment. On the pool of the stream the bubbles now vanish from sight, now burst forth. They never remain for long. Men and their habitations suffer the same fate.”である。私たち日本人はこうした人の世の無常感をこれまで生きる意味を考え模索する際の精神的な基盤としてきたことだろう。分相応に「足るを知り」生きてゆくことを是としてきたと思う。

時代はとどまることなく大きく変わり、今や少子高齢化やグローバル化という怪物が社会や教育環境を取り巻き、日本の将来の方向を決定づけようとしている。国力の低下につながると考えられる少子化高齢化の中、グローバル化という波が、競争すること、生き抜くためにその競争に勝つことを求めている。学校教育においては、その時代の風が英語教育に強く吹き荒れている。朝日新聞朝刊社説（平成 26 年 10 月６日）に、文部科学省の有識者会議が、「アジアでトップクラスの英語力を目指すべきだ」と提言をまとめたとある。グローバル化が進むなか、英語力の向上は極めて重要であるとしても、トップをめざすことが英語教育の目的であるかのような提言である。そのためか、文科省は小学校での英語教育の導入や、中学校でも「英語の授業は英語で」という教育施策を押し進めようとしている。その上、英語の教員には英語の検定試験を受験させて、一定以上の能力を有することを押し進めている。朝日新聞朝刊（平成 26 年 11 月 20 日） には、「『英検準１級以上』などの力を持つ英語の先生の割合は、公立高校で 53%、公立中学校では 28%だったことが文部科学省の調査でわかった。国が掲げる『高校 75%、中学 50%』」の目標には及ばず、文科省は検定試験を受験するよう呼びかけている」とある。社会科や数学科の教員にはそうした検定試験による能力が話題に上ることもないが、英語科教員には常に英語能力が問われている。実際は検定試験の能力と授業力とには正の整合性を有するという証明はなされていない。世界ランキングのような一律基準による序列化をもたらすグローバル化の傾向がこうした影響を与えていると思われる。果たして、それでいいのだろうか。

生徒が身につける学力として、英語力の有無が社会での就職の標準として何よりも重要な要件であるのだろうか。「使える英語」を身につける一辺倒の教育が、未来圏から吹く時

代の風なのだろうか。英語教育の目的は何なのであろうか。文法などに偏ることなく、互いの考えを英語で伝え合う学習や、発表や討論を充実させる活動などを取り入れることが求められているが、そうしたことだけでよいのだろうか。前出の朝日新聞社説には「日本の英語の国際的なテストの平均点は確かにアジアで最低レベルだ。だが、最も肝心なのは国のランクではない。子どもたちが異なる文化に触れ、さまざまな価値観の人々と出会い、その世界を広げることだろう」と述べている。虫の鳴き声などを言語中枢で聞く日本人の脳は、音を右脳・左脳で聞き分けている。クラクションは左脳で聞き、夜汽車の汽笛は右脳で聞く。それは物事の捉え方が異なる文化を有していることである。人々の考え方が国によって異なる、そうした文化の違いの根底に流れるものを知ることが大切であろう。それが学びである。大学の英語教育でも、テキストのコンテンツは、今は現代の諸相を扱った論説文が多い。論理的に考えることを促すには、そうした教材が適している。しかしながら、昔学んだようにシェークスピア、ディッケンズ、ホーソーン、メルビル、スタインベック、ヘミングウエイ等々の英米文学を教材に感性や根底に流れる文化を学ぶことも必要ではないか。考え・判断・表現するには、それなりの教養が必要であると同時に考える力を身につけておかなければならない。それは生きるための知恵と言えるかもしれない。

鴨長明の世界観は無常である。異なった見方をすれば、世の中は変化してこそ正しいものになるとも考えられる。自然も変化する、人間も変化する、地球も変化する、世の中も変化する、そうした中で人は生き、生かされている。それゆえ変化を否定していては、成長はない。しかしながら変化を闇雲に鵜呑みして判断を下すのではなく、生徒・学生に現実社会の困難を乗り越え、自己を深く生かす道を模索させることを、教育は求めるべきであろう。それには未来圏から吹く風をどう捉えていくべきであろうか。鴨長明は「閑居の気味」の章で、「事を知り、世を知れれば、願はず、わしらず、ただ静かなるを望みとし、憂へ無きを楽しみとす」と記している。

■参考文献

社説「英語教育 アジアトップ級って？」朝日新聞朝刊 平成 26 年 10 月6日(月)

「英語力持つ先生、目標以下 英検準1級や TOEIC730 点以上」朝日新聞朝刊 平成 26 年 11 月 20 日(木)

（なかい・ひろかず　教授／教員養成センター長）